

宮崎神宮雑感

このお社を考察するとき慶応3年生まれで昭和29年に没した伊東忠太に(山形県米沢市出身)触れなければなりません、伊東氏は建築家であり建築史家であります。帝国大学工科大学(東京大学工学科)に学び、西洋建築を基礎にしながら日本建築を本格的に見直した第一人者であり、法隆寺が日本最古の寺院建築であることを学問的に示し、日本建築史を創始したと言われ、それまで『造家』の言葉で表されていたものを現在われわれが使う『建築』という言葉に改めたともいわれています。

伊東は築寺本願寺・檀原神宮・平安神宮など多くの社寺の建築を手がけ、この宮崎神宮もその一つであります。伊勢神宮を模した本神宮、今回本殿を目にすることができませんでしたが本殿の型式は切妻造妻入り型式です、その本殿に続いて渡り殿(通殿)、幣殿(拝殿)を備えています、そしてこれらの神域部分は玉垣で仕切られ一般参拝者はその神域には普段入れず、島根ではあまり見かけないその前面の建物(拝所)から礼拝を行う格式を重んじた境内形式となっています。

これはご祭神として神武天皇がまつられていることによるものと思われます、現在の壮大な境内は明治時代において、ここが神武天皇の最初の宮地であるとの伝承から特別待遇を受けることとなり、広く全国から寄付を集め整備が行われています。その後昭和15年の再整備により、その当時奈良檀原神宮に次ぐ全国第二位の神域規模を誇るまでの神宮となったようです。

今回の参拝により、明治時代に整備されたという現社殿のほとんどが地域の杉材を利用しているという点を知りこのことに非常に興味を惹かれました。現在私たちの島根においては社寺建築に使用する用材のほとんどが松または桧であり杉の出番はほとんどないように思います。しかしながら松材は松くい虫の被害により壊滅的なダメージを受け、材の枯湯も時間の問題でとまで言われる深刻な状況です。今後は松材に代わり伐期を逃したいわれの大径木杉材が大いに社寺用材として利用されることを期待したいと思います、また自らそれを実践してゆきたいと思います。

古代出雲大社の高層神殿以来、技術も進歩し知見も改まり再び島根も全国も杉の時代がやってくるのではないのでしょうか。そんな今、しまね木造塾も大いに学び(木質構造技術)を深めていかなければならないと思います。

追記

神宮内の徴古館(木造造2階建て瓦葺き)は伊東忠太の設計によるものとのことです、木立の中にシンメトリックなプロポーションにとても彫りの深い見事なまでのなまこ壁を全身にまとった姿は、形態は洋式でありながら趣は格式を意識させる和テイストという“明治という時代?”を感ずる素晴らしい建物でした、ただし今は倉庫としての利用で荒廃が少し気になるころでした、できれば積極的な活用による保存が望まれると思いました。

2015.02.21 亀山英嗣